

ウイリアムス神学館

卒業小論文

マタイ福音書における『目の見えない』について

2013年3月

古本 靖久

## はじめに

わたしたちの用いている聖書の中には、「見ること」や「光」など、視覚に関わる言葉が多く用いられている。福音書におけるイエスの「まなざし」、弟子たちが何かを「見る」行為や「ともし火」といった灯はその例である。または自らのことを「わたしは世の光である」と告げ、「見ないのに信じる人は、幸いである」と言われたイエス。さらにパウロの回心の際、彼の視力が失われたことなども挙げられよう。では聖書において、「見ること」の本来的な意味は何なのであろうか。

本稿では「見ること」の意味を深く知っていく手掛かりとして、逆の方向からではあるが τυφλός (目の見えない、目の見えない人<sup>1)</sup>) のマタイ福音書での用法について考察していく。マタイ福音書には「インマヌエル」(1:23) と「私はお前たちとともにいる」(28:20) といった inclusio (囲い込み)<sup>2</sup>が見られるなど、著者の神学がその編集に多く現れているように思われる。この考察を通して、マタイの神学的な強調点に触れていきたい。

研究方法としては、τυφλός の使われ方や意味を、他の共観福音書の用例と比較すること、またマタイ福音書における τυφλός の位置を検証することなどで、τυφλός を積義的に理解することを目指す。

なお、断りが無い限り、聖書本文の引用および小見出しについては、『聖書 新共同訳』(日本聖書協会、1987年)を使用する。

## 1、τυφλός の旧約聖書における用例

τυφλός に対応する意味を持つヘブライ語の単語は、七十人訳聖書(以下 LXX)において τυφλός と訳されている עִוְרִי と考えることができる。したがって、ここではまず、עִוְרִי の意味と用法を見ていく。

オリエント地方では、気候的・衛生的理由から目の見えない人が多くおり<sup>3</sup>、人々にとって「目が見えない」状態になることは決して非日常的なことではなかった。そのため、旧約聖書の中にも、この語は多く用いられている。

まず、ルカ 4:18 で引用されているイザ 61:1 (LXX)<sup>4</sup>には、「目の見えない人に視力の回復を告げ」という宣言が見られる。当時の社会においては、目の見えないという状況は絶望的なものであり、悲惨なものであると見なされていた<sup>5</sup>。目の不自由な人は献げ物の務めをしてはならず(レビ 21:18-21)、神殿にも入れなかった(サム下 5:8)。さらに、目の見えない人は他の人の助け(ヨブ 29:15)を借りなければ、生きていくことも困難な状態であったことは想像に難くない。目の見えぬ者の前に障害物を置くことは

<sup>1</sup> 新共同訳聖書をはじめとする多くの日本語訳聖書は「盲人」と訳しているが、本稿では聖書本文などの引用以外のところでは「目の見えない人」と表記する。

<sup>2</sup> マタイ福音書に多く見られるもので、鍵言葉の反復や重複化によって物語の中の強調部分や主題などを浮かび上がらせる文学的な手法。(U. ルツ(小河陽訳)『マタイによる福音書』(EKK 新約聖書註解 I/1) 教文館、1990年、27頁。)

<sup>3</sup> H. J. Stoebe 「盲人 Blinder」、旧約新約聖書大事典編集委員会『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年、1179頁。

<sup>4</sup> イザ 61:1 「主はわたしに油を注ぎ 主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして 貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み 捕らわれ人には自由を つながれている人には解放を告知させ、目の見えない人に視力の回復を告げるために。」(LXX では、下線部「τυφλοῖς ἀνάβλεψιν」が加えられている。)

<sup>5</sup> G. Schneider 「τυφλός」、荒井猷・H. I. マルクス監修『ギリシア語新約聖書積義事典 III』教文館、1995年(以下『積義事典 III』)、422頁。

禁じられ（レビ 19:14）、また目の見えない人を道に迷わせることは呪われる（申 27:18）と書いてあることから、共同体からの保護を必要とする存在であったのだろう。

そして、この「目の見えない」ということは、神の主権の下での神の懲罰と考えられていた<sup>6</sup>。それは出 4:11 における神とモーセとの会話や、神の呪い（申 28:29）の記述などから読み取れるのだが、この考え方はそのままイエスの時代にも引き継がれていたものであった（ヨハ 9:2）。

しかし終末には、その目の見えない人たちに対する救いの約束があることも描かれる。前述したイザ 61:1 の他に、イザ 29:18、35:5、42:7 において、救いの日にはメシアのいやす力によって、見えない人の目が開かれることが書かれている。また新しい約束（エレ 31 章）の中では、「目の見えない人も」大いなる会衆となって帰って来る（エレ 31:8）ことが述べられる。

さらに旧約聖書において、転義的に使われている箇所も多く見ることができる。宗教的な認識能力や理解能力に関係している<sup>7</sup>、つまり目が見えないことは、神の奇跡や意志を認識せず、それに従って生きることのできない無能力を表現している<sup>8</sup>。その例としてイザ 42:18-19、43:8、59:10、そしてゼファ 1:17 などが挙げられる。

このように、旧約聖書において「目の見えない人」とは、絶望的な状態にある人を指しており、終末の救いの時に目が開かれるのを待つ人である。そして「目の見えない」ということは、物理的に見えなだけでなく、認識や理解ができていない状態を指していることがわかる。

## 2、τυφλός の新約聖書における用法

新約聖書において τυφλός は、以下のように用いられている。ここからはまず、マタイ福音書に並行記事をもたない箇所の用法について考察していく。

	マタ	マコ	ルカ	ヨハ	使徒	ロマ	2 ペト	黙
<u>τυφλός</u> の出現回数	17	5	8	16	1	1	1	1
上記のうち マタイに並行記事なし	—	2	3	16	1	1	1	1

### 2 - 1、使徒言行録・書簡・黙示録における用法

使徒言行録においては、τυφλός は一度しか出てこない（使 13:11）。これはパウロがバルイエスという偽預言者に対して失明の罰を与えている場面である。ここで出てくる「目が見えなくなって」という言葉は、本来の意味、すなわち身体的な意味での「目の見えない」と捉えてよいだろう。

またこの語は、パウロ書簡には一回（ロマ 2:19）、公同書簡に一回（2 ペト 1:9）用いられている。ロ

<sup>6</sup> 木田献一他監修『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社、1995年、547頁。

<sup>7</sup> G. Schneider 「τυφλός」、『積義事典 Ⅲ』、422頁。

<sup>8</sup> H. J. Stoebe 「盲人 Blinder」、『旧約新約聖書大事典』、1179頁。

一マ書においてパウロは、律法に頼るユダヤ人は「目の見えない人の案内者…」であると自負していると言っている。この用いられ方は 2 - 2 で考察する「手引きをする τυφλός」と同じようにも見えるが、異邦人たちだけが「目の見えない人」であって、ユダヤ人は自らを「見える」と思っているところは異なる。だがいずれにせよ、ここでは身体的に「目の見えない」という意味ではなく、転義的に用いられている。

2 ペトロ書の「視力を失っています」についても、実際に目が見えない、という意味では用いられておらず、以前の罪が清められたこと、つまり洗礼の祝福を失った者という意味で用いられている<sup>9</sup>。書簡における出現数は少ない。

さらに、黙示録においてもこの語は一度しか使われていない（黙 3:17）。ここではラオディキアの人たちに対して、あなたたちは満ち足りている者ではない、ということを行うために、比喩として使用しているのみである。このように黙示録においても出現数は少ない。

## 2 - 2、ヨハネ福音書における用例

### 2 - 2 - 1、単に「目の見えない人」として（ヨハ 5:1-18、10:7-21、11:28-37）

ヨハネ福音書の中で最初に τυφλός が出て来るのは、5:1-18「ベトザタの池で病人をいやす」においてである。カナの婚礼（2 章）、そして役人の息子をいやす（4 章）という二回のしるしをおこなった後、イエスはエルサレムに上り、羊の門の傍らにあるベトザタの池の五つの回廊に向かう。その回廊に横たわっている人の中に、「目の見えない人」は登場する（ヨハ 5:3）。ここでイエスがいやすのは「目の見えない人」ではないのだが、救いを待つ人たちの中にこの人は存在している。

また 10:7-21「イエスは良い羊飼ひ」、11:28-37「イエス、涙を流す」においては、9 章の具体的なイエスのいやしの行為に対する言及となっている。すなわち、10:21 においても 11:37 においても、「目の見えない人の目を開けた」イエスのわざについて語る。これらの箇所は 9 章との関連において理解されなければならない。

### 2 - 2 - 2、具体的ないやしの中で（ヨハネ 9:1-34）

この 9 章全体は、ヨハネ共同体の状況と体験を「目の見えない人」を通して劇的・象徴的に造形して見せたとされる。すなわちこの奇跡物語は、一旦安息日違反の問題として論じられるが、これは副次的な問題にすぎず、その行為をおこなったイエスがいったい何者なのか、という中心的問題への橋渡しとして位置する<sup>10</sup>。

ヨハネ共同体はイエスをキリストと告白した結果、ユダヤ教から追い出されていく。そのことを「目の見えない」人がいやされて「見える」ものとなる体験を通して語られていると捉えることができる。

<sup>9</sup> J. シュナイダー（斎藤顕訳）「ペテロの第一の手紙」、『公同書簡』（NTD 新約聖書註解 10）NTD 新約聖書註解刊行会、1975 年、235 頁。

<sup>10</sup> cf. 大貫隆『世の光イエス』（福音書のイエス・キリスト④ ヨハネによる福音書）講談社、1984 年、80 頁。

9:1-12「生まれつきの盲人をいやす」の中では2回、9:13-34「ファリサイ派の人々、事情を調べる」の中では8回と、合計10回 τυφλός が出てくるのだが、いずれも現実的に「目の見えない」こと、あるいは人を指している。ここでの中心はイエスにあるというよりは、イエスが見えるようにされた者にある<sup>11</sup>。そして9:31では「わたしたち」という語が使われている。この言葉は象徴的に、一世紀末のヨハネ共同体に属する人々の、信仰に入る以前の姿を指しているともできるだろう<sup>12</sup>。

### 2 - 2 - 3、比喩的転義の意味として（ヨハ 9:35-41）

9:35-41「ファリサイ派の人々の罪」の中で、τυφλός は比喩的転義的な意味で用いられている。すなわち9:39-41の中で「見える」こと、「見えない」ことについてイエスは目が開かれた人やファリサイ派の人々に対して語っている。その中で「見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」との言葉がある。ヨハネ福音書が書かれた時点において、ヨハネ共同体に属する人たちはユダヤ教の会堂からの排斥を経て教会に来た<sup>13</sup>。この9章の記事の中で、生まれながらに目の見えない人はイエスによっていやされたエルサレムの一ユダヤ人としてだけでなく、自分たちの信仰のゆえに、また恐ろしい祈願<sup>14</sup>のゆえに、分離された教会の一員になったユダヤ人としての一面を持つといえよう<sup>15</sup>。すなわちその当時のヨハネ共同体が見えない者から見える者にされ、ユダヤ教の人々が見える者から見えない者とされたととらえることもできる。

このようにヨハネ福音書においては、τυφλός は9章を中心として用いられている。それらは物理的に見えないという意味だけではなく、比喩的な意味も持つということがいえる。

## 2 - 3、マルコ・ルカ福音書における用例

### 2 - 3 - 1、神に受け入れられる対象として（ルカ 4:16-30、14:7-14、15:24）

ルカ 4:16-30 は新共同訳の小見出しで「ナザレで受け入れられない」となっている箇所である。この中にあるいわゆる「ナザレ宣言」の中でイザ 61:1 (LXX) が引用されているのだが、そのうちルカ 4:18に「目の見えない人」が登場する。ここでイエスは、視力の回復が告げられるために自らが遣わされたことを宣言する。

また、ルカ 14:7-14「客と招待する者への教訓」の中に、またルカ 14:15-24「大宴会のたとえ」の中に「目の見えない人」は登場するが、そこで彼らは、宴会や神の国の祝宴に招かれる客として描かれる。招かれたとしても何のお返しもできず、また自ら神の国の扉をたたくことも出来ない彼らこそが招かれ

<sup>11</sup> cf. D. M. スミス（松永希久夫訳）『ヨハネ福音書の神学』（叢書新約聖書神学3）新教出版社、2002年、46頁。

<sup>12</sup> cf. 大貫、79頁。

<sup>13</sup> cf. J. L. マーティン（原義雄・川島貞雄訳）『ヨハネ福音書の歴史と神学』日本基督教団出版局、1984年、50頁。

<sup>14</sup> ヤムニアにおいて制定されたとされる「十八の祈願」の中にあるミーニーム（異端者たち）に対する祈り。

<sup>15</sup> cf. マーティン、75頁。

る、というわけである。

この三つの箇所を見ると、解放のメッセージの中で τυφλός は用いられているようである。そしてイエスによる人間の解放のメッセージはルカ福音書の福音にほかならない<sup>16</sup>。これらの箇所の並行記事はマタイ福音書には見られないため、ルカの記事の元になった伝承をマタイが知っていたのかどうかはわからない。いずれにせよ、ルカにとって「目の見えない人」は、社会から疎外された存在であり、神の憐れみによって解放されていく、イエスの福音宣教の対象であることが読み取れる。

### 2-3-2、具体的ないやしの中で (マコ 8:22-26)

マコ 8:22-26「ベトサイダで盲人をいやす」において、「目の見えない人」が出て来る。マタイには二度、目の見えない人に対するいやしの記事がある。マルコにもこの記事と「盲人バルティマイをいやす」(マコ 10:46-52)の二度、いやしの記事があるが、マタイはそれぞれの記事を採用したのではなく、バルティマイの記事を 9:27-31 と 20:29-34 の二度にわたり、編集して記したと考えられている<sup>17</sup>。

なぜマルコの「ベトサイダで盲人をいやす」はマタイでは採用されなかったのだろうか。マタイが参考にした資料には入っていない記事であり、マタイはその伝承を知らなかったのか。知っていたが、採用しなかったのか。

マタイはこの「ベトサイダで盲人をいやす」のほかに、「耳が聞こえず舌の回らない人をいやす」(マコ 7:31-37)という記事も採用していない。この二つの記事に共通しているのは、イエスがおこなっているいやしの魔術的な面が強調されている点と考えられる。すなわち、耳が聞こえず舌の回らない人に対しては「指をその両耳に差し入れ」、「唾をつけてその舌に触れられ」ていやされる。また、ベトサイダの目の見えない人に対しては、「その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて」何か見えるかと尋ねた後、「もう一度両手をその目に当てられ」ていやしたと書かれている。

マタイにとってのイエス像が、マルコ福音書に見られる奇跡行為者とはかけ離れていたため、マタイにこの記事がない、と言えよう。

## 3、τυφλός のマタイ福音書における用例

ここではマタイ福音書における τυφλός の用法を考察していく。マタイ福音書において τυφλός の出現回数についてはすでに 1-2 でふれたが、ここではマルコ・ルカ福音書との比較をしながら、マタイは編集によってどのようにこの語を用いているのか、そしてそれによって何を強調しているのかを探っていききたい。

具体的には、まずいやしの場面に用いられている τυφλός を検討する。洗礼者ヨハネの弟子に対していやしの報告をする際に τυφλός についての言及があるが、その意味を考察する。次にベルゼブル論争や四

<sup>16</sup> cf. 加山久夫『ルカの神学と表現』(聖書の研究シリーズ 47) 教文館、1997年、59頁。

<sup>17</sup> U. ルツ (小河陽訳)『マタイによる福音書』(EKK 新約聖書註解 I/2) 教文館、1997年、85頁。

千人の供食の直前、あるいは神殿の境内から商人を追い出すといった物語の導入に見られる τυφλός について検討する。最後に具体的ないやしの場面を考察することによって、τυφλός はマタイの中でどのような意味を持ち、それをどう伝えようとしているのかを明らかにすることを旨とする。

またマタイ 15 章に見られる、手引きをする τυφλός や 23 章のファリサイ派批判に見られる比喩的転義的意味についても考慮する。

### 3-1、いやしの場面において

#### 3-1-1、いやしの報告として (11:2-19「洗礼者ヨハネとイエス」)

マタイ 11:2-6	マルコ	ルカ 7:18-23
<p>2 ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。 そこで、自分の弟子たちを送って、</p> <p>3 尋ねさせた。</p> <p>「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」</p> <p>4 イエスはお答えになった。 「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。」</p> <p>5 <u>目の見えない人</u>は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。</p> <p>6 わたしにつまずかない人は幸いである。」</p>		<p>18 ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた。 そこで、ヨハネは弟子の中から二人を呼んで、</p> <p>19 主のもとに送り、こう言わせた。 「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」</p> <p>20 二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、 『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」</p> <p>21 そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の<u>盲人</u>を見えるようにしておられた。</p> <p>22 それで、二人にこうお答えになった。 「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。」</p> <p><u>目の見えない人</u>は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。</p> <p>23 わたしにつまずかない人は幸いである。」</p>

この記事は、牢に入れられた洗礼者ヨハネ<sup>18</sup>が弟子たちを遣わして、イエスが来るべき方であるかどうか

<sup>18</sup> ルカ福音書では、洗礼者ヨハネが牢にいたということは書かれていない。

かを尋ねる場面である。この問いかけに対し、イエスはイザ 35:5-6 などに見られる、神によるイスラエルの救済を描写する章句<sup>19</sup>をもって応答している。ただし、ここに出て来る「重い皮膚病を患っている人のいやし」と「死者の生き返り」は旧約聖書の中では言及されておらず、ただ預言を実現するだけではなくそれを超えるイエスの姿を見ることができる。

ここには五つの奇跡が書かれているが（マタ 11:5）、それぞれはすでにマタイ福音書の中で実際におこなわれていたものである。すなわち、目の見えない人のいやし（9:27-31）、足の不自由な人のいやし（9:2-8）、重い皮膚病を患っている人の清め（8:1-4）、耳の聞こえない人のいやし（9:32-34）、死人の生き返り（9:18-26）である。また貧しい人に対する福音の告知は山上の説教を想起させる<sup>20</sup>。このようにこの 11:5 に見られる奇跡の列挙はそれまでイエスが実際に行ってきたことであり、イエスはヨハネの弟子たちに対して「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい」と告げるのである。

この箇所はマルコに並行記事がなく Q 資料に由来すると考えられるが、ルカ版との大きな違いは、ルカ 7:21「そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。」がマタイには無いところであろう。ルカがこの部分を追加したのか、あるいはマタイが削除したのかはわからないが<sup>21</sup>、マタイにとってこれらの奇跡はヨハネの弟子たちに対し、直接的に体験させる必要のないものであったとも考えられる。ここにマタイの関心であるイエスの弟子たちと、ヨハネの弟子たちをも含む他の人たちとの間の鋭い対比を見ることがもできる<sup>22</sup>。ヨハネは牢の中でイエスの業を聞いていたが、弟子たちを使いに出した。その真意はヨハネのイエスに対する不信からかもしれないが、イエスはヨハネの弟子たちに見聞きしていることを伝えるようにと言った。牢の中ですでにイエスの業を聞いているヨハネに対して、それ以外の証拠を与えることをしなかった。

Τυφλός が見えるようになったこと、このことを含めた五つの奇跡をヨハネに知らせるようにと言ったこと、そのことは旧約の預言の成就を意味し、神の国が開始されたことを物語っているのかもしれない<sup>23</sup>。つまり表現と構成を預言者的待望表現（イザ 61:1、29:18-19、35:5-6、42:18）によって規定する<sup>24</sup>ことで、それまでの記事が単なるいやしの報告ではなく、神によって始められた救いの業であると考えることができるのである。

### 3 - 1 - 2、物語の導入として（12:22-32「ベルゼブル論争」、15:29-31「大勢の病人をいやす」、21:12-17「神殿から商人を追い出す」）

#### 3 - 1 - 2 - 1、「ベルゼブル論争」

マタイ 12:22-23	マルコ	ルカ 11:14
--------------	-----	----------

<sup>19</sup> D. ヒル（大宮謙訳）『マタイによる福音書』（ニューセンチュリー聖書注解）日本キリスト教団出版局、2010年、239頁。

<sup>20</sup> cf. ルツ、EKK I/2、218頁。

<sup>21</sup> ルツはルカ 7:20-21 をルカの編集句であるとする（ルツ、EKK I/2、218頁。）

<sup>22</sup> cf. 小河陽『マタイ福音書神学の研究 その歴史批評的考察』教文館、1984年、57頁。

<sup>23</sup> cf. 橋本滋男「マタイによる福音書」、『新共同訳 新約聖書注解 I』日本基督教団出版局、1991年、84頁。

<sup>24</sup> ルツ、EKK I/2、224頁。



<p>22 そのとき、悪霊に取りつかれて<u>目が見えず</u>口の利けない人が、イエスのところに連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。</p> <p>23 群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。</p>	<p>※マルコ福音書にも「ベルゼブル論争」(3:20-30)はあるが、マタ12:22-23に並行する箇所はない。</p>	<p>14 イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。</p> <p>悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。</p>
---	--	--

この記事は「ベルゼブル論争」の冒頭に出て来る。ルカでは口の利けない人、マタイでは目が見えず口が利けない人に取りついた悪霊を追い出して、その結果、論争になっていくという場面である。マルコにはいやしの記事はなく、すぐに論争に入っている。

また、マタ12:27、28、30とルカ11:19、20、23とは並行しており、この記事がQ資料に由来する可能性も指摘できる。しかしマタ12:29とマコ3:27には並行関係が見られ、またマルコにも論争部分があることから、どの伝承がオリジナルなのかを決定することは容易ではない。

さて、この部分を見て非常に特徴的なのは、マタイが「口の利けない」だけではなく「目の見えない」という状況を付加しているところである。マタイはこの箇所より前に、すでに口の利けない人をいやすイエスの業を報告している(マタ9:32-34)。群衆は驚嘆し、ファリサイ派の人々は悪霊の頭の力で悪霊を追い出していると言いだすこの箇所を、12:22-32の記事はさらに「目が見えない」ことも付加して再現していると考えられる<sup>25</sup>。この「ベルゼブル論争」での強調点は、悪霊に取りつかれた人が「目の見えない」状態であったことであるともいえるが、9章の「口の利けない人をいやす」記事の直前に「二人の盲人をいやす」(マタ9:27-31)があり、「目が見えず、口が利けない」状態として考えることもできるだろう。

イエスのいやしの業を見て群衆は驚嘆し、9章では「こんなことは、今までイスラエルで起こったためしはない」と言い、12章では「この人はダビデの子ではないだろうか」と言う。反面、違った反応を示す人たちの姿も描かれる。マタイでは9章でも12章においてもファリサイ派が悪霊の頭の力で悪霊を追い出していると言った、と書かれている(9:34、12:24)が、マルコでは「律法学者<sup>26</sup>」(3:22)、ルカでは「群衆の中のある人々」(11:15)となっている。このことから、マタイのファリサイ派<sup>27</sup>に対する批判が見えてくる。さらに、目の見えない状態と、ファリサイ派の人々が事実を正しく見ることのできないという現実との重ね合わせも指摘できるのではないか<sup>28</sup>。

### 3-1-2-2、「大勢の病人をいやす」

<sup>25</sup> cf. 橋本、新共同訳、89頁。

<sup>26</sup> のちに論争を始めるのはファリサイ派となっている。

<sup>27</sup> マタイはファリサイ派と律法学者を「偽善者」と同義語に扱い、ファリサイ派や律法学者の義はイエスが弟子たちに要求する義と対比されて陳述される。(小河、『マタイ福音書神学の研究』、353頁)。したがって「ファリサイ派」と書かれている場合にも、律法学者の存在も含有されていると考えられる。

<sup>28</sup> cf. 橋本、新共同訳、89頁。

マタイ 15:30-31	マルコ	ルカ
<p>30 大勢の群衆が、足の不自由な人、<u>目の見えない人</u>、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。</p> <p>31 群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、<u>目の見えない人</u>が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。</p>		

この箇所は、続く「四千人に食べ物を与える」（マタ 15:32-39）記事と共に一単位をなしている<sup>29</sup>。しかしマルコの四千人の供食物語の前にあるいやしの記事（マコ 7:31-37）とこの箇所の内容とは大きく異なる。マルコの記事「耳が聞こえず舌の回らない人をいやす」において、イエスはいやしの業を行うのだが、そこには魔術的な要素や異教的呪文が見受けられ、またこの秘密を守るようにとの命令もある。マタイはそれらの箇所を削除し、イザ 35:5-6 を想起させる記述を行う。

前述した「洗礼者ヨハネとイエス」の中のいやしの報告（マタ 11:5）とこの箇所は対応しているが、ここでは具体的ないやしが行われている点、そして群衆がイスラエルの神を賛美した点が特徴的である。この「イスラエルの神を賛美した」ということから、群衆の多くは異邦人であったという指摘がある<sup>30</sup>。つまり、11 章ではイスラエルへの働きであったイエスの業が、この 15 章では異邦人への働きへと図式化されているように考えるのである<sup>31</sup>。このことを、五千人の供食と四千人の供食の比較からも読みとろうとする立場がある<sup>32</sup>。だが「イスラエルの神をたたえよ」という言い方は詩篇の中にも見られる表現であり<sup>33</sup>、ここだけで群衆を異邦人であると決めることは難しい。また、マタイの文脈においては、異邦人宣教は「大宣教命令」（マタ 28:18-20）からであると考えの方が一般的であり、ここはいやしも含めた業を、イエスは彼の民イスラエルに繰り返している点を言おうとしている<sup>34</sup>、と考えた方がよいだろう。

マタイは供食物語の冒頭に、イエスが「目が見えない」人を含む多くの人たちをいやしている様子を描く。その描写はイザヤ書を想起させ、また 11 章の内容をくり返すものである。山上の説教においてはこのいやしの内容と供食物語が山の上で行われることでイエスの言葉を通して神の意志が啓示されるのに対して、この第二番目にあたる山の上の光景では、いやしと供食というイエスの行為を通して神の権能が啓示され<sup>35</sup>、彼が旧約の預言にもとづくメシアであることを印象づけるのである。

### 3 - 1 - 2 - 3、「神殿から商人を追い出す」

<sup>29</sup> ルツ、EKK I/2、565 頁。

<sup>30</sup> 橋本、新共同訳、106 頁。；ヒル、311 頁。；増田誉雄「マタイの福音書」、『新聖書注解第一巻』いのちのことば社、1972 年、139 頁。

<sup>31</sup> 橋本、新共同訳、107 頁。

<sup>32</sup> 古代教会の釈義家たちは、種々様々の数字の象徴を用いた。例えば、五つのパン→旧約的律法、七つのパン→聖霊の七倍の恵みが揭示され与えられる新約聖書、四千人の供食…四→すべての方角（ルツ、EKK I/2、570 頁。）五千人の供食…5→モーセ五書、十二の籠→イスラエル民族の代表としての十二弟子、七つの籠→七十の国々、使 6:1 に見られる七人の奉仕者など（橋本、新共同訳、107 頁。）

<sup>33</sup> 詩 41:14a 「主をたたえよ、イスラエルの神を」、詩 72:18a 「主なる神をたたえよ イスラエルの神」、詩 106:48a 「イスラエルの神、主をたたえよ 世々とこしえに。」

<sup>34</sup> ルツ、EKK I/2、571 頁。

<sup>35</sup> D. R. A. ヘア（塚本恵訳）『マタイによる福音書』（現代聖書注解）日本基督教団出版局、1996 年、321 頁。

マタイ 21:12-17	マルコ 11:15-19	ルカ 19:45-48
<p>12 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。</p> <p>13 そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』</p> <p>ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている。」</p> <p>14 境内では<u>目の見えない人</u>や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。</p>	<p>15b イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。</p> <p>16 また、境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった。</p> <p>17 そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』</p> <p>ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。」</p>	<p>45 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、</p> <p>46 彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』</p> <p>ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」</p>

いわゆる「エルサレム入城」(マタ 21:1-11)のあと、共観福音書はイエスが神殿から商人を追い出す記事を書ける<sup>36</sup>。ここでイエスは神殿を「強盗の巣」と非難するのだが、マタイはその直後に神殿境内にいた目の見えない人、足の不自由な人たちに対するいやしの記事を置く。このいやしは、共観福音書の中ではエルサレムで行った唯一の治癒であるため、マタイにとっては特に重要であると考えられる<sup>37</sup>。

ここでイエス時代の神殿がどういう状況であったかを確認しておきたい。サム下 5:8 やレビ 21:17 を根拠に体の不自由な人は神殿に入れないことになっていたと思われるし、またミシュナにおいても目の見えない人や足の不自由な人は、神殿で主の前に出ることや犠牲をささげることから除外させられた<sup>38</sup>。さらにクムランの「会衆規定」(1QS a 2.5-22)によれば、足の不自由な人、目の見えない人、耳の不自由な人、口の利けない人は、会衆からもメシアの祝宴からも除外された<sup>39</sup>。

強盗の巣とイエスから非難された神殿だが、イエスがそこにいることで目の見えない人は見えるようになり、足の不自由な人は歩けるようになるとマタイは述べる。神殿から締め出された彼らが再び神殿に来ることができるようになった、ということよりも、「ダビデの子」メシアによるいやしによって、新

<sup>36</sup> マルコでは二つの記事の間に「いちじくの木を呪う」(マコ 11:12-14)がある。

<sup>37</sup> cf. E. シュヴァイツァー (佐竹明訳)『マタイによる福音書』(NTD 新約聖書註解 2) NTD 新約聖書註解刊行会、1978年、559頁。

<sup>38</sup> 『ミシュナ』「ハギガー」1:1 (安息日と祭りに関する規定)(ヒル、360頁。)

<sup>39</sup> cf. ヒル、360頁。

しい民の参集が始まったことを強く印象づけられる<sup>40</sup>。

マタ 11:5、15:30 を想起させるこの宮浄めの記事を、マタイは神殿での行為として描く。そこにはマタイの持つダビデの子理解も関係するのかもしれない。すなわち、マタイはイスラエルのいやしを行うダビデの子たるメシアが、イスラエルの宗教的中心である神殿において活動すると考える。これと重ねあわせる形で、イエスが神殿においてイスラエルに対する彼のメシア的使命を成就して行うことが強調されているのではないだろうか<sup>41</sup>。

「ダビデの子」という呼びかけを含む記事はイエスのエルサレム入城の前後に頻出しているのだが<sup>42</sup>、イエスをダビデの子として、つまり彼らのメシアとして歓呼し、イエスが預言者であることを認めるのは誰であろうか。それは子どもたち (21:15) や、イスラエルの群衆 (21:9)、そして目の見えない者たち (20:34) である。つまりこの人々には、イスラエルにおける「小さき者たち」こそイエスが誰であるかということ認識している<sup>43</sup>、そのことが見えている、ということではないだろうか。

これらの者たちが、イエスの治癒行動の「対象」である。そして目の見えない人が見えるようになり、足の不自由な人が歩けるようになり、耳の聞こえなかった人が聞こえるようになることにおいて、今や神の救いの時が開始していることが明らかなのである<sup>44</sup>。

ここまで、「いやしの報告として」、そして「物語の導入として」の中で τυφλός の用いられ方を検証してきた。ここで明らかになった点は、マタイにおいて「目の見えない」人のいやしがイザヤ書 35 章などの旧約預言の成就として考えられているという点である。その出来事は神の民イスラエルの前で繰り返され、人々はその行為に「ダビデの子」という呼称を用いて驚き、賛美する。同時にそこには対照的にイエスを糾弾する人々が現れる (21:15) ことにも目を留めておきたい。

そして、山上の説教において言葉を通し神の意志を啓示したイエスは、再び山の上で (15:32-38) いやしと供食という行為を通して神の権能を啓示する。それによって、イエスが旧約の預言にあるメシアであることを印象づける。神殿での多くの人々のいやしについても、「ダビデの子」メシアによる新しい民の選びが始まったことを印象づけさせ、マタイ共同体の人々や読者に対して神の支配の始まりを意識づけるのである。

### 3 - 1 - 3、具体的ないやしの中で (9:27-31、20:29-34)

#### 3 - 1 - 3 - 1、「二人の盲人をいやす (9:27-31)」

マタイ 9:27-31	マタイ 20:29-34
27 イエスがそこからお出かけになると、	29 一行がエリコの町を出ると、

<sup>40</sup> cf. U. ルツ (小河陽訳) 『マタイによる福音書』(EKK 新約聖書註解 I/3) 教文館、2004年、230頁。

<sup>41</sup> cf. ルツ、EKK I/3、p.226頁。

<sup>42</sup> マタ 20:30,31 「二人の盲人をいやす」、マタ 21:15 「神殿から商人を追い出す」の場面で見られる。前者の並行記事 (マコ 10:47,48、ルカ 18:38,39) にはマタイと同様に「ダビデの子」というイエスへの呼びかけが見られるが、後者の並行記事 (マコ 11:15-19、ルカ 19:45-48) の中には「ダビデの子」という記述はない。

<sup>43</sup> cf. U. ルツ (原口尚彰訳) 『マタイの神学』(聖書の研究シリーズ 46) 教文館、1996年、108頁。

<sup>44</sup> cf. L. ショットロフ、W. シュテゲマン (大貫隆訳) 『ナザレのイエス 貧しい者の希望』日本基督教団出版局、1989年、190頁。

<p>二人の盲人が叫んで、 「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。</p> <p>28 イエスが家に入ると、盲人たちがそばに寄って来たので、「わたしにできると信じるのか」と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。</p> <p>29 そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりになるように」と言われると、</p> <p>30 二人は目が見えるようになった。イエスは、「このことは、だれにも知らせてはいけない」と彼らに厳しくお命じになった。</p> <p>31 しかし、二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた。</p>	<p>大勢の群衆がイエスに従った。</p> <p>30 そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、</p> <p>「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。</p> <p>31 群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、</p> <p>「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。</p> <p>32 イエスは立ち止まり、二人を呼んで、</p> <p>「何をしてほしいのか」と言われた。</p> <p>33 二人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と言った。</p> <p>34 イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、</p> <p>盲人たちはすぐ見えるようになり、</p> <p>イエスに従った。</p>
--	---

ここから、イエスが目の見えない人をいやした記事について考察をおこなうが、マタイ福音書は他の福音書に比べて、イエスの治癒活動に大きな意義を付していると考えられている<sup>45</sup>。その理由として、いやしの報告が重要な場面で数多くなされていること、またこの 9:27-31 のように、20:29-34 の二重記事と思われるいやしの場面が存在することなどが考えられる。

では、9:27-31 における τυφλός はどのような意味を持つのだろうか。

まず、マタイはマコ 10:46-52 のバルティマイの物語を 9:27-31 と 20:29-34 の二度にわたって報告していると考えられるのだが<sup>46</sup>、その理由としては、イエスの行いを報告する 11:5 の前に、目の見えない人のいやしについて語る必要があったことがあげられる<sup>47</sup>。またベトサイダのいやし（マコ 8:22-26）の出

<sup>45</sup> 橋本滋男『イエスとマタイ福音書』（聖書の研究シリーズ 65）教文館、1994年、35頁。

<sup>46</sup> cf. 橋本、新共同訳、76頁。

<sup>47</sup> cf. ルツ、EKK I/2、85頁。

来事を、魔術的要素を省いてその意味が明瞭に表現される叙述形式で報告しただけなのかもしれない<sup>48</sup>。9:27-31 のマタイ福音書の中での位置づけについては後述することとし、ここではこの箇所を持つ意味を見ていきたい。

このいやしの記事において、イエスは二人の目の見えない人をいやされた。マルコ（マコ 8:22-26 「ベトサイダで盲人をいやす」、マコ 10:46-52 「盲人バルティマイをいやす」）やルカ（ルカ 18:35-43 「エリコの近くで盲人をいやす」）のいやしの記事においては、いやされる人はすべて一人だった。しかしマタイではこの箇所およびマタ 20:29-34 「二人の盲人をいやす」、マタ 8:28-34 「悪霊に取りつかれたガダラの人をいやす<sup>49</sup>」においても、いやされる対象は二人となっている。マタイがマルコの資料をもとにして福音書を編集したのであれば、一人が二人に増えていることには意味があると思われる。

## 1) ユダヤの法

まず考えられるのは、ユダヤの法的習慣との関連だろう。すなわち、死罪などあらゆる犯罪の立証は二人ないし三人の証人による証言が必要であるとする申 19:15 との結び付きである。マタイ福音書の中でも二人または三人の証人に言及する箇所もあり（マタ 18:16）、一人のいやしの証言だけでは不足するから、だという考え方である。

しかし、証人が実際にいやされた人だけに限られる必要はない。周りにいた群衆や弟子たちも「目撃した」証人の一人であって、数だけ見ればまったく不足はないはずである。また、いくら二人の証人が必要だからと言って同時にいやす必要もないだろう。乱暴な言い方をすれば、9章と20章で別々の人がいやされたのであれば、そこで複数の証人は確保されるのである。だとすれば、なぜ「二人」なのか。

マタイは 18:19-20 において、「あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら」という言葉を入れている。他の福音書にはないこの言葉をマタイが編集した意図を考えると、そこに「共同体」としての祈りに言及していると考えすることはできないだろうか<sup>50</sup>。「二人」というのは人間が一致できる、あるいは一致できない最少の数であり、そのため祈りが聞き入れられるかどうかは様々な人たちとの人間関係にかかっている。また純粋に自我に関わる祈りは聞き入れられない（20:23、26:39）<sup>51</sup>。この「共同体」としての祈り、願いという考え方に基づいて、マタイはいやされる人数を「一人」ではなく「二人」としたのではないか。

## 2) 無名性

また別の角度から考えてみると、マタイはマルコの「バルティマイ」という名前を消している。その理由はいろいろと考えることはできるが<sup>52</sup>、名前を持っていないことで読者がいやしを自分のこととして読むことが容易になる<sup>53</sup>ということもいえると思う。

つまり、肉体的な目の見えない人のいやしの希望が、内的に目の見えない状態からの克服を期待<sup>54</sup>する

<sup>48</sup> cf. 小河陽『旧約の完成者イエス』（福音書のイエス・キリスト① マタイによる福音書）講談社、1983年、140頁。

<sup>49</sup> 並行箇所であるマコ 5:1-20、ルカ 8:26-39「悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす」では、いやされるのは一人である。

<sup>50</sup> cf. シュヴァイツァー、511頁。

<sup>51</sup> ルツ、EKK I/3、72頁。

<sup>52</sup> 橋本は「マルコの時代には当人はかなり名の知れたキリスト者であったが、マタイの時代にはもう過去の人となり、わざわざその名まで書きとどめる必要や親しみを感じなかったため、彼の名を省略したのだとも考えられる」とする（橋本、新共同訳、126頁。）

<sup>53</sup> ルツ、EKK I/2、85頁。

<sup>54</sup> J. シュニーヴィント（量義治訳）『マタイによる福音書』（NTD新約聖書註解別巻）NTD新約聖書註解刊行会、1980年、252頁。

とともに、このいやされた人と自らの同一視が、病気や困難な時に主が具体的に助けてくださるという読者の確信<sup>55</sup>にもつながっていくのである。この確信の背景にあるのが、自らも信仰的に目が開かれた経験を持つマタイの共同体だといえるのではないだろうか。

### 3) ダビデの子

さて、目の見えない人たちはここで「ダビデの子」という名称でイエスを呼ぶ。「ダビデの子」という言い方はマタイ福音書において頻出するイエスの呼称で、この箇所のような目の見えない人の叫び<sup>56</sup>のほかに、系図の中や天使の呼び掛けの中<sup>57</sup>で、ベルゼブル論争の中で<sup>58</sup>、エルサレム入城の場面で<sup>59</sup>、そして救いを求める女性の声に出てくる<sup>60</sup>。ダビデの子であるという呼称は、憐れみ深いいやし手としてのイエスの働きを言い表しているとともに<sup>61</sup>、イエスの時代には政治的解放者としての意味合いも強かった<sup>62</sup>。この目の見えない二人が発する「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」という声は、イスラエルのメシアに頼るしかない、憐れみを欲するしかない状況を伝えるとともに、この二人が「目が見える」と思っている人たちが認識できていない、来たるべき救いの時に約束されたメシアという最大の希望を認識したという事実を強く示唆しているのではないか<sup>63</sup>。

マタ 9:27-31 の記事では、マコ 10:46-52 やルカ 18:35-43 の記事と同様に、信仰が強調されている。「わたしにできると信じるのか」と言われた後、「はい、主よ」と答える二人に対してイエスが「あなたがたの信じているようになるように」と告げる。マルコやルカでは「あなたの信仰があなたを救った。」という言葉でイエスはいやすのに対し、マタイの記事では信仰問答的色彩が強い<sup>64</sup>。「目を開く」という行為がイザヤ書に述べられているメシアによる救いであるならば、イエスと出会ったときに信仰を問われた共同体の人々は、その告白によりイエスをメシアであると受け入れ、目が開かれていくのである<sup>65</sup>。

イエスは目の見えない人たちを家の中でいやし、「だれにも知らせてはいけない」と厳しくお命じになった<sup>66</sup>。ここで使用されている言葉は、非常に強い思いと深い感情、憤慨ないし怒りさえも言い表しているという<sup>67</sup>。この命令を受けてもなお、「家」という閉ざされた空間の中でいやされた人が沈黙命令を違反してまでもイエスのことを言い広める。このことから、「ダビデの子」は決してイスラエルにおける周辺的な現象ではないということが明らかにされるのではないだろうか<sup>68</sup>。それゆえにマタイはこの後に、群衆が驚嘆しながら言った言葉「こんなことは、今までイスラエルで起こったためしが無い」(マタ 9:33)を書き入れているのかもしれない。

55 ルツ、EKK I/2、90 頁。

56 マタ 9:27、20:30,31、マコ 10:47,48、ルカ 18:38,39。

57 マタ 1:1、1:20。

58 マタ 12:23、マルコ・ルカの並行記事には「ダビデの子」は出てこない。

59 マタ 21:9,15、マルコ・ルカの並行記事には「ダビデの子」は出てこない。

60 マタ 15:22「カナンの女の信仰」、マルコの並行記事「シリア・フェニキアの女の信仰」には「ダビデの子」は出てこない。

61 ヒル、261 頁。

62 増田、117 頁。

63 cf. ヘア、197 頁。

64 増田、117 頁。

65 cf. ルツ、EKK I/2、90 頁。

66 「厳しくお命じになった」新共同訳、「きびしく戒めて」新改訳第三版・口語訳・フランシスコ会訳、「激しく息巻き、言った」岩波訳。

67 ヒル、217 頁。

68 cf. ルツ、EKK I/2、90 頁。

3-1-3-2、「二人の盲人をいやす (20:29-34)」

マタイ 20:29-34	マルコ 10:46-52	ルカ 18:35-43
<p>29 一行が</p> <p>エリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。</p> <p>30 そのとき、二人の盲人が道端に座っていたが、</p> <p>イエスがお通りと聞いて、</p> <p>「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。</p> <p>31 群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。</p> <p>32 イエスは立ち止まり、二人を呼んで、</p> <p>「何をしてほしいのか」と言われた。</p> <p>33 二人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と言った。</p> <p>34 イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、</p>	<p>46 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。</p> <p>47 ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、</p> <p>「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。</p> <p>48 多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。</p> <p>49 イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。</p> <p>人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」</p> <p>50 盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。</p> <p>51 イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。</p> <p>盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。</p> <p>52 そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救っ</p>	<p>35 イエスがエリコに近づかれたとき、</p> <p>ある盲人が道端に座って物乞いをしていました。</p> <p>36 群衆が通って行くのを耳にして、「これは、いったい何事ですか」と尋ねた。</p> <p>37 「ナザレのイエスのお通りだ」と知らせると、</p> <p>38 彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。</p> <p>39 先に行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。</p> <p>40 イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れて来るように命じられた。</p> <p>彼が近づくと、イエスはお尋ねになった。</p> <p>41 「何をしてほしいのか。」</p> <p>盲人は、「主よ、目が見えるようになりたいのです」と言った。</p> <p>42 そこで、イエスは言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救っ</p>



<p>盲人たちはすぐ見えるようになり、</p> <p>イエスに従った。</p>	<p>た。」</p> <p>盲人は、すぐ見えるようになり、</p> <p>なお道を進まれるイエスに従った。</p>	<p>た。」</p> <p>43 盲人はたちまち見えるようになり、</p> <p>神をほめたたえながら、</p> <p>イエスに従った。</p> <p>これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。</p>
---	---	--

20:29-34 は先ほどの 9:27-31 の二重記事と考えることができるが、他の共観福音書の並行記事と比較して、マタイにおいて特徴的な点は、「主よ (κύριε キュリエ)」という呼びかけが三度<sup>69</sup>あることである。三つの福音書は共に「憐れんでください (ἐλέησον エレエーソン)」という命令形の言葉を二度用いているが、この二つの語が結びついた「κύριε ἐλέησον」という言葉が今でも礼拝の中で使われている<sup>70</sup>ことを考えても、これが共同体全体に関わる箇所であることをマタイは強調しているようである。

ここで、マタイは 9:27-31 で強調されていた「信仰」というモチーフを後退させる。マルコ、ルカの並行記事では「あなたの信仰があなたを救った」というイエスの言葉があるが、マタイはこれを取り入れていない。これは「信仰」というものが不要ないということではなく、「イエスが深く憐れんで、その目に触れられると」を 20:34 に加えることによって、「憐れみ」によるいやしという主題を浮かび上がらせる。この 34 節のイエスの憐れみは、20:30-31 と異なり「σπλαγγνίζομαι (スプランクニゾマイ)」という語を用いて表現されている。この語は新共同訳では「深く憐れんで」、新改訳第三版では「かわいそうに思って」、そして岩波訳では「腸がちぎれる想いがし<sup>71</sup>」と訳されるが、語源である「σπλάγγνον」は「はらわた」とともに、感情の宿る所という意味を持つ<sup>72</sup>。邦訳聖書では「憐れむ」という語がよく使われるが、そこには上下関係が感じられる。しかしこの語の本来の意味は「共感的」な側面を持つ<sup>73</sup>。

マタイでこの語は、二人の目の見えない人をいやし (9:27-31)、口の利けない人をいやした (9:32-34) 場面の直後に、「群衆に同情する」(9:35-38) イエスの感情を表す語として用いられる。また、五千人の供食 (14:13-21) と四千人の供食 (15:32-39) の中ではマルコの記事をそのまま採用し、また「仲間を赦さない家来のたとえ」(18:21-35) の中でも使われている。だがここでマタイは編集によってこの語を加えており、イエスが苦しんでいる人間を憐れんで受け入れ、助ける者であることを強調する<sup>74</sup>。さらにエルサレム入城の直前に置かれたこの箇所での強調は、イエスの十字架の受難の死が神の意志に一致する憐れみの行為に他ならないことを示す<sup>75</sup>。憐れみによって目を開けられた者たちは、イエスに従い、イエスの受難の場面を見なければならぬ、ということも示唆しているかもしれない。

<sup>69</sup> ルカには一度、マルコにはない。

<sup>70</sup> 日本聖公会『祈祷書』1990年、163頁。

<sup>71</sup> 佐藤研訳『新約聖書翻訳委員会訳 新約聖書』岩波書店、2004年、145頁。

<sup>72</sup> N.Walter 「σπλάγγνον」、『釈義事典 III』、304頁。

<sup>73</sup> 木原桂二『ルカの救済思想 断絶から和解へ』日本キリスト教団出版局、2012年、203頁。

<sup>74</sup> N.Walter 「σπλαγγνίζομαι」、『釈義事典 III』、304頁。

<sup>75</sup> 小河、『旧約の完成者イエス』、174頁。

#### 4) ὄμμα

目の見えない二人はイエスに対し、「主よ、目 (ὄφθαλμός) を開けていただきたいのです」と言った (20:33)。その言葉を聞いたイエスは深く憐れんで、その目 (ὄμμα) に触れられた (20:34)。このように使われている単語を変えたことには意味があるように思われるが、ὄμμα は新約聖書中で二回しか用いられていない語であり<sup>76</sup>、新約の中では本義的用法のみだとされている<sup>77</sup>。だが、古典ギリシア文学や初期キリスト教文学ではしばしば「心の目」という熟語をなしているという<sup>78</sup>。であるならば、マタイは目の見えない人の懇願にはない語をわざわざイエスのいやしの行為の叙述に用いることで、単に彼らの願いどおりにしたというのではなく、彼らの期待以上のものを与えたことをも含意させていると考えることもできる<sup>79</sup>。

#### 5) 「開く」

また、目の見えない人の言葉はマルコ (10:51) やルカ (18:41) では「目が見える (ἀναβλέπω) ようになりたいのです」であるが、マタイでは「目を開けて (ἀνοίγω) いただきたいのです」となっている。この「開く」という語はマタ 9:27-31 の場面でも使われているマルコ・ルカに比して特徴的に使われている語<sup>80</sup>で、(後ほど詳しく考察する)、「再び見える」のではなく、「目が開かれる」となっているところにマタイの意図が見えてくる。すなわち、イエスによって目が開かれた読者自身の経験を重ねあわせることになる<sup>81</sup>。

エルサレム入城を前にして、この「目が開かれる」神の憐れみの業をどう受け止めたらよいのだろうか。イエスは憐れみ深いメシアとして、自らの民のために死ぬためにエルサレムへと向かう。イエスの口からはもはや沈黙命令は聞かれない (マタ 9:30)。イエスは王として、エルサレムへの入城を果たそうとしている。沈黙の時は過ぎ去ったのである<sup>82</sup>。

ここまで、具体的ないやしの中での τυφλός について考察してきた。マタイにおいて、名前の報告がない人物が二人、同時にいやされることから読者との同一性や共同体としての共感を見ることができた。そしてそのいやしは単なる肉体的なものだけではない。「主よ、わたしを憐れんでください」という叫びに応える神の憐れみによって、「目が開かれる」者となった経験を持つマタイ共同体の者たちは、この後、十字架につけられるイエスのもとへと共に向かうのである。

エルサレム入城の際に従う者が叫ぶ「ダビデの子にホサナ」という声 (マタ 21:9)<sup>83</sup>。その声は旧約の時代から約束されたいやし主であり王であるメシアを待望するものであった (詩 118:26、148:1-4)。その直前に、「主よ、ダビデの子よ」と叫ばれたイエスのいやしが語られていることは、どのような意味を持つのだろうか。

<sup>76</sup> マタ 20:34 とマコ 8:23 「ベトサイダで盲人をいやす」でのみ用いられている。

<sup>77</sup> 「ὄμμα」、荒井献・H. I. マルクス監修『ギリシア語新約聖書釈義事典 II』、教文館、1994年、578頁。

<sup>78</sup> W. F. Arndt, F. W. Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, Chicago, IL: Chicago Univ. Press / London: Cambridge Univ. Press, 1952<sup>4</sup>, p.568.; cf. 橋本、新共同訳、126頁。

<sup>79</sup> cf. 橋本、新共同訳、126頁。

<sup>80</sup> ルツ、EKK I/1、45頁。

<sup>81</sup> cf. ルツ、EKK I/3、208頁。

<sup>82</sup> cf. ヘア、410頁。

<sup>83</sup> エルサレム入城の際にイエスが「ダビデの子」と呼ばれるのはマタイだけである。並行箇所であるマコ 11:9、ルカ 19:38、ヨハ 12:13 にその表現は出てこない。

3 - 2、手引きをする τυφλός (15:1-20)

マタイ 15:10-14	マルコ 7:14-15	ルカ 6:39
<p>10 それから、イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。」</p> <p>11 口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」</p> <p>12 そのとき、弟子たちが近寄って来て、「ファリサイ派の人々がお言葉を聞いて、つまずいたのをご存じですか」と言った。</p> <p>13 イエスはお答えになった。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、すべて抜き取られてしまう。</p> <p>14 そのままにしておきなさい。彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴に落ちてしまう。」</p>	<p>14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。</p> <p>15 外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」</p>	<p>39 イエスはまた、たとえを話された。</p> <p>「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。」</p>

イエスがゲネサレトで病人をいやした (14:34-36) あと、ティルスとシドンの地方に行く (15:21-28) 前に、マタイはエルサレムから来たファリサイ派の人々と律法学者たちとの問答である「昔の人の言い伝え」(マタ 15:1-20) の中で、目の見えない人の手引きについて報告する。この流れはマルコ福音書に沿って書かれているが、ここで特徴的なのは、その手引きについて言及されている部分 (マタ 15:12-14) がマルコにはないことである。また同じ表現はルカ 6:39 にも見られるものの、場面設定も語る対象も異なっている<sup>84</sup>。なおマタ 15:14 とルカ 6:39 について、Q 資料が基になっていたかどうかは議論が分かれている<sup>85</sup>。

マタ 15:12-14 は、弟子たちの「ファリサイ派の人がつまずいた」という報告を受けたイエスが語ったものであるが、イエスの時代のファリサイ派、あるいは律法に忠実なユダヤ人は、イスラエルは律法を所有しているからあらゆる民族の中でただ一人目が見えない者ではないと自覚していた (ロマ 2:19-20、ヨハネ 9:40-41) <sup>86</sup>。そして律法を読み、解釈することによって、目の見えない人たち、すなわち律法に

<sup>84</sup> ルカではこの言葉は「平地の説教」(ルカ 6:20-49) の中で、弟子たちに対して語られている。

<sup>85</sup> ルツは「その言葉が Q にあったのかどうかは非常に疑わしい」(EKK I/3、208 頁) と言うが、シュニーヴィントは「14 節は Q から出ている」(NTD 別巻、387 頁) とする。

<sup>86</sup> シュヴァイツァー、444 頁。

忠実でない人たちを指導する使命があると考えていた。パウロはローマ書の中で、「また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています」（ロマ 2:19-20）とユダヤ人に対して語る。しかしユダヤ人は諸民族の光、また目の見えない人の手引きとしての使命を誤認してしまい<sup>87</sup>、イエスに反対する者となっていく。そしてマタイは、ファリサイ派に代表される反対者へ攻撃を向けるイエスの言葉を挿入する。そこにはマタイの時代の会堂の指導者も重ね合わせられているのだろう<sup>88</sup>。

ここで出てくる「穴に落ち込む」という言い方は旧約の中に見られ（イザ 24:18、エレ 48:44、詩 7:16、箴 26:27）、破壊を意味する表現である<sup>89</sup>。ファリサイ派の人々は律法を知り、解釈していたが、それは彼らが律法を理解しているということを決して保証するものではない<sup>90</sup>。さらに、世を照らす光であるイエスを拒む彼らを、イエスは「目の見えない者」と言う。彼らファリサイ派の人々は目の見えない指導者だが、イエスは目の見えない人をいやす者なのである<sup>91</sup>。

そしてこの比喩表現はファリサイ派のみならず、自分たちを他の者と比べてましな者であると自認するマタイの共同体や 1 世紀の読者、そして現代のわたしたちをも含むあらゆる世代の読者、すなわちすべてのキリスト者に対しても語りかけているのではないだろうか<sup>92</sup>。

### 3 - 3、比喩的転義的意味 (23:1-36)

マタイ 23:16-26	マルコ	ルカ 11:39-42
<p>16 <u>ものが見えない</u>案内人、あなたたちは不幸だ。あなたたちは、『神殿にかけて誓えば、その誓いは無効である。だが、神殿の黄金にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。</p> <p>17 愚かで、<u>ものが見えない</u>者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。</p> <p>18 また、『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その上の供え物にかけて誓えば、それは果たさねばならない』と言う。</p> <p>19 <u>ものが見えない</u>者たち、供え</p>	<p>※マルコ福音書にも「律法学者を非難する」（12:38-40）はあるが、マタ 23:16-26 に並行する箇所はない。</p>	

<sup>87</sup> 小河陽、『旧約の完成者イエス』、278 頁。

<sup>88</sup> cf. R. H. フラー（鈴木真也訳）「マタイによる福音書」、『ハーバー聖書注解』教文館、1996 年、1009 頁。

<sup>89</sup> 増田、138 頁。

<sup>90</sup> シュヴァイツァー、444 頁。

<sup>91</sup> ルツ、EKK I/2、548-549 頁。

<sup>92</sup> cf. L. ショットロフ、W. シュテゲマン（大貫隆訳）『ナザレのイエス 貧しい者の希望』日本基督教団出版局、1989 年、236 頁。

<p>物と、供え物を清くする祭壇と、どちらが尊いか。</p> <p>20 祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上のすべてのものにかけて誓うのだ。</p> <p>21 神殿にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ。</p> <p>22 天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ。</p> <p>23 律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。薄荷、いのんど、茴香の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もないがしろにしてはならないが。</p> <p>24 <u>ものが見えない案内人</u>、あなたたちはぶよ一匹さえも漉して除くが、らくだは飲み込んでいる。</p> <p>25 律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ。</p> <p>26 <u>ものが見えないファリサイ派</u>の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。</p>		<p>42 それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが。</p> <p>39 主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。</p> <p>40 愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。</p> <p>41 ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。</p>
---	--	--

この 23 章では、ファリサイ派と律法学者たちがマタイ共同体の人々と対照的に描かれており、明らか

に、ファリサイ派が指導権を持つという主張に対してマタイ共同体が戦っているといえる<sup>93</sup>。

ファリサイ派の人々は、イエスの目の見えない人に対するいやしを否定し、その業を悪魔の頭の力によるものであると宣告した（マタ 12:24）。彼らは再三再四、イエスによって新しい視力を贈られるのを拒絶してきたともいえよう<sup>94</sup>。また「ものが見えない」の意味で五回繰り返される τυφλός は、マルコやルカの並行箇所には一度も見られず、ファリサイ派の人々と律法学者たちの無理解を強調する表現となっている。つまりマタイにとって、目の見えない人とはファリサイ派と律法学者を意味することが分かる。

マタイ福音書が書かれた時代、ヘレニズム世界にはすでに多くの異邦人教会が生まれ、マタイ共同体も異邦人宣教へと向かっていった<sup>95</sup>。その結果として必然的にファリサイ派からマタイ共同体への批判が激しくなったと思われる。この状況の中でマタイ共同体は、ファリサイ派ユダヤ教と異邦人教会のはざまに位置しつつ、自分たちはユダヤ教の正統かつ正当な発展線上にあるというアイデンティティを確保する必要に迫られ、ことさらにファリサイ派の人々たちに対する非難を打ち出しているのである<sup>96</sup>。

イエスは、ファリサイ派の人々たちには律法が本来意図していることとその解釈との間の矛盾が見えていないと指摘した<sup>97</sup>。そして彼らは自分たちが目の見えない人たちの、とりわけ異邦人たちの「道案内人」であるという主張（ロマ 2:19）と正反対に、人々を目の見えないままにしっかりと引き留めている<sup>98</sup>。その状況はマタイ共同体、あるいはマタイの時代の異邦人に対するファリサイ派の人々たちの実態を示しているのではないだろうか。

以上のように、マタ 15:1-20 および 23:1-36 において強調されているのは、マタイ共同体と、律法学者も含むファリサイ派との対置であった。目が見える者という自覚を持ちながら、目の見えない人の道案内人という使命を誤認しイエスに反対するファリサイ派は、マタイの時代の会堂の指導者にも重ね合わされている。そしてイエスは、世の光であるイエス自身を拒む彼らこそが「目の見えない者」と呼ぶのである。つまり、ここでマタイが強調しているのはファリサイ派の無理解である。

#### 4、マタイ福音書の中での位置

ここまで τυφλός の用法を見てきたが、マタイ福音書の中で τυφλός はどのような位置に置かれ、また福音書全体に対してどういった影響を与えているのだろうか。用法を個別に見ていく中で明らかにされてきた τυφλός の意味は、マタイ福音書においてどのように強調されているのだろうか。

本章では、これまでの積義的考察を踏まえて、τυφλός とファリサイ派、また ἀνοίγω（開く）という語との関係について論考していきながら、マタイ福音書の中で τυφλός がどのような位置に置かれ、どのように強調されているのかを、まとめていきたい。なおマタイ福音書の構成の仕方については諸説あるが、

<sup>93</sup> cf. U. ルツ（原口尚彰訳）『マタイの神学』（聖書の研究シリーズ 46）教文館、1996年、123-124, 174頁。

<sup>94</sup> cf. ルツ、EKK I/3、398頁。

<sup>95</sup> ハーンは「マタイの教会はイスラエル寄りの立場をとってはいるものの、異邦人に対して開かれた態度をとっている」という（F. ハーン（勝田英嗣訳）『新約聖書の伝道理解』新教出版社、2012年、157頁。）

<sup>96</sup> cf. 角田信三郎『マタイ福音書の研究』創文社、1996年、223頁。

<sup>97</sup> cf. ヘア、461頁。

<sup>98</sup> cf. ルツ、EKK I/3、390頁。

本稿では便宜的に小河陽氏の説<sup>99</sup>を採用する。

#### 4 - 1、τυφλός とファリサイ派との関係

マタイ福音書にはファリサイ派に対する言及が多く見られる。

まず、マルコにあるファリサイ派に対する言及を引き継ぐ箇所がある（「レビを弟子にする」マコ 2:16 → 「マタイを弟子にする」マタ 9:11、「断食についての問答」マコ 2:18 → マタ 9:14、「安息日に麦の穂を摘む」マコ 2:24 → マタ 12:2、「手の萎えた人をいやす」マコ 3:6 → マタ 12:14、「昔の人の言い伝え」マコ 7:1 → マタ 15:1、「人々はしるしを欲しがる」マコ 8:11 → マタ 16:1、「ファリサイ派の人々とヘロデのパン種」マコ 8:15 → 「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」マタ 16:6、「離縁について教える」マコ 10:2 → マタ 19:3、「皇帝への税金」マコ 12:13 → マタ 22:15）。

さらにマタイは、マルコよりも多くの箇所でファリサイ派について言及する。例えばマルコの並行箇所にはファリサイ派について書かれていないが、マタイにはある箇所（「ベルゼブル論争」マタ 12:24、「昔の人の言い伝え」マタ 15:12、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」マタ 16:11, 12、「ぶどう園のたとえ」マタ 21:45、「最も重要な掟」マタ 22:34、「ダビデの子についての問答」マタ 22:41、「律法学者とファリサイ派の人々を非難する」マタ 23:2, 13, 15, 23, 25, 26, 27, 29、「番兵、墓を見張る」マタ 27:62）、またルカと並行しているがマタイのみにファリサイ派についての言及が見られる箇所（「洗礼者ヨハネ、教えを宣べる」マタ 3:7 → cf. ルカ 3:7、「人々はしるしを欲しがる」マタ 12:38 → cf. ルカ 11:29）、さらにマルコ・ルカには並行箇所がなくマタイ独自の箇所（「律法について」マタ 5:20、「口の利けない人をいやす」マタ 9:34）がある。これらの箇所が踏まえている資料についての検証はここでは行わないが、以下においてこれらがマタイの文脈の中で「目の見えない」という言葉とどのように関わりあっているのかを見ていきたい。

マタイ福音書の中でファリサイ派は、イエスがガリラヤ宣教を始める前、洗礼者ヨハネが洗礼をおこなっている場面に初めて登場する。これは宣教の備え、ガリラヤ宣教の始め（3:1-4:25）にあたる部分である。ファリサイ派が洗礼者のもとに洗礼を受けにくるというこの記事はマルコにはない。またルカには並行箇所はあるものの、洗礼を受けに来たのはファリサイ派ではなく群衆となっている（ルカ 3:7）<sup>100</sup>。この姿は一見、ファリサイ派が洗礼者ヨハネに対して謙虚に歩み寄る姿を描いているようにも見える。またおそらく好奇心のゆえに洗礼を受けに来たとする注解者もいる<sup>101</sup>。だがマタイが記すような、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢洗礼を受けに来たという状況は史実であったかどうかは疑問である。むしろマタイは、罪を告白し洗礼を受けた人々と区別するために、ファリサイ派に対して「悔い改めの実を結べ」と述べたのではないだろうか<sup>102</sup>。だとすれば、ここにマタイによるファリサイ派と洗礼を受けた人々との鋭い対比を読みとることができよう。

続いて山上の説教（5:1-7:29）の中に、ファリサイ派についての言及が見られる。イエスの言葉（5:20）にファリサイ派の人々の義について書かれているが、この箇所はマルコ・ルカには並行記事がない。独

<sup>99</sup> 小河『旧約の完成者イエス』、78-81頁。

<sup>100</sup> ルツはこの箇所はQ資料に由来し、ファリサイ派とサドカイ派への言及はマタイの編集であるとする（ルツ、EKK I/1、203頁。）

<sup>101</sup> ヒル、109頁。

<sup>102</sup> cf. ルツ、EKK I/1、204頁。

自にこの資料を採用したマタイには、ファリサイ派の人々の義と弟子たちの義との比較を強調する意図があったと考えることができる<sup>103</sup>。前段落での考察と同様、ここでもファリサイ派と弟子たちとの対比が続いている。

山上の説教を終え、イエスは多くのいやしの業をおこなう（8:1-9:34）。その中でマタイを弟子にし（9:9-13）、断食について問答をおこなう（9:14-17）。ここではまず、ファリサイ派は徴税人や罪人と一緒に食事をするイエスを非難する（9:11）。イエスはそのファリサイ派に対して、ホセ 6:6 の引用をもって返答をする（9:13）。すなわち、イエスは預言者の命令を成就しているのものであって、何がより良き義であるのかを示している<sup>104</sup>。たとえ徴税人や罪人であったとしても、人を分け隔てすることは義ではなく、そのことにこだわるファリサイ派はより小さな義にこだわっていることをマタイは示そうとしている。

そしてヨハネの弟子たちによって、断食をおこなうファリサイ派の姿が描き出される（9:14）。古い時代からユダヤ人は、罪に対する遺憾の念を表明する手段として、また神の審判を避ける手段として、断食を実践していた<sup>105</sup>。しかし 6:16-18 ですでに偽善者の断食について糾弾したイエスの言葉を受け、マタイはその断食を、花婿の到来、すなわち神の国の到来を否定する古い革袋と解釈したのかもしれない<sup>106</sup>。

この一連の流れを経た上で 9:27-31 を見ていくと、本稿 3-1-3-1 で論じた中でも確認したように、特に信仰問答的な要素が強調されているように感じる。すなわち、ダビデの子であるイエスと出会ったマタイ共同体の人々は、信仰を問われ、イエスをメシアとして受け入れたときに目が開かれた者となったのである。この二人の目の見えない人は信仰告白をする前の自分たちの姿であり、今、イエスを受け入れたマタイ共同体の人々もまた目が開かれているのだ、ということをも強調しているのではないか。一方ファリサイ派はここでも、「あの男は悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言う（9:34）。マルコ・ルカには現れないこのファリサイ派の言葉は、彼らがメシアの到来を見ているにもかかわらず「見えない」者であるという状況を浮き彫りにする。

続く第二の説教（9:35-11:1）が終わった後、新たな物語のスタートとして、マタイは洗礼者ヨハネの弟子がイエスの元を訪ねる内容を置く。ここから始まる一連の物語を、小河は「偽イスラエルの拒否」と名付ける<sup>107</sup>。ここでイエスは、目の見えない人のいやしを含む奇跡の報告をするよう、ヨハネの弟子たちに告げる。その業は旧約の預言を超えるもので、まさに神によるイスラエルの救済が開始されたことを示すものであった。つまり、これは単なるいやしの報告というよりも、神によって始められた救いの業の報告であったと言えるだろう。

だが、この報告を聞いたファリサイ派はイエスの弟子たちの行動を非難した（12:1-8）。いわゆる安息日論争である。イエスは、弟子たちが安息日にしてはいけないことをしている（12:2）と詰め寄るファリサイ派に対し、9:13 同様、ホセ 6:6 の言葉を用いると共に、自らが神殿よりも偉大なものであり（12:6）、人の子は安息日の主（12:8）だと宣言する。さらに安息日に自ら手の萎えた人をいやすイエス（12:13）に対して、ファリサイ派の人々はイエスに対して殺意を抱くようになる（12:14）。ファリサイ派はここから完全にイエスの反対者となる。14 節にある「出て行く」という語は、マタイ共同体とも完全に袂を

<sup>103</sup> *ibid.* 342 頁。

<sup>104</sup> *cf.* ルツ、EKK I/2、69 頁。

<sup>105</sup> ヘア、189 頁。

<sup>106</sup> *cf.* ルツ、EKK I/2、73 頁。

<sup>107</sup> 小河『旧約の完成者イエス』、79 頁。



分かつようになったファリサイ派の状態を想起させる<sup>108</sup>。

続いて、目の前でイエスのいやしを見たファリサイ派は (12:22)、「この人はダビデの子ではないだろうか」(12:23) という群衆の言葉を聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」(12:24) と否定をする。ここでマタイはマルコの「エルサレムから下って来た律法学者たち」(マコ 3:22) を「ファリサイ派」に変え<sup>109</sup>、またマルコにはない「目の見えない人のいやし」を付加している。このことは、マタイがここでも、目が見えるようになった人とファリサイ派とを対比させようとしていることを示す。いやしの業やメシアの到来といったしるしを見たにもかかわらず、ファリサイ派は「しるしを見せてください」(12:38) とイエスに言う。これもやはり、ファリサイ派は見えていない、ということを示している。この「人々はしるしを欲しがる」(12:38-42) は Q 資料に由来し、「律法学者とファリサイ派の人々」という導入句はマタイに帰せられる<sup>110</sup>。したがって、マタイがファリサイ派を「見えない者」と強調していることがここでも明らかである。

その後、湖のほりににおけるイエスの第三の説教を挟み (13:1-58)、マタイは再びイエスの行動に焦点を当てる。そしてファリサイ派がイエスのもとに登場し、イエスの弟子の行動を非難する (15:1-2)。彼らは律法を解釈し、それを民に伝える者だという自覚を持っていた (ロマ 2:19-20)。だが彼らが大切にしていた口伝伝承こそが人々を苦しめ、誤った方向に導いていたとイエスは伝えたかったのではないだろうか<sup>111</sup>。そしてマタイ共同体も、このイエスの言葉を借りてマタイの時代のユダヤ人たちの会堂の指導者に対し、同じことを伝えようとしたのではないか。このイエスの言葉を聞いて躓いてしまったファリサイ派の人々 (15:12) に対し、イエスは「彼らは盲人の道案内をする盲人だ」(15:14) と言われる。まさに世を照らす光であるイエスを拒む彼らは、神の言葉を無にする「目の見えない者」であると断罪されるのである。

続く部分で、イエスはティルスとシドンの地方に行った後、ガリラヤ湖のほりに行き、山に登る (15:29)。マタイにとって山は神に近づくことのできる場所であった<sup>112</sup>。イエスが山の上におり、その足もとに病人が置かれる様子は、イザ 52:7 の喜びの使者の像が模範になっているという指摘もある<sup>113</sup>。マタイは、イエスが山の上でおこなったいやしの業 (15:29-31) を、四千人に食べ物を与える記事 (15:32-39) の直前に置く<sup>114</sup>。これは、目の見えない人を含むいやされた人たちは、神を賛美し、食卓の交わりへと招かれることを意味している。だが、イエスに「目の見えない者」だとされたファリサイ派は、食事の場所には登場しない。

次の場面では、イエスに対する殺意を覚え、イエスに躓き、イエスから「目の見えない者」であるとされたファリサイ派はサドカイ派と共に、イエスに「天からのしるしを見せてほしいと願った」(16:1)。12:38 で「しるしを見せてほしい」と願った彼らは、今度は「天からの」と、単なる奇跡に留まらない宇宙的なしるしを願う<sup>115</sup>。しかし彼らは二人の目の見えない人のように「主よ、目を開けていただきたい

<sup>108</sup> cf. ルツ、EKK I/2、313 頁。

<sup>109</sup> ルカは誰が「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ…」という言葉が誰が言ったのか、明記していない。

<sup>110</sup> ルツ、EKK I/2、354 頁。

<sup>111</sup> マタイは、15:3-6 はマコ 7:9-13 から、15:7-9 はマコ 7:6-8 から採用する。この言葉がイエスまで遡るか否かは定かではないが、マタイの創作ではないことだけは明らかである。

<sup>112</sup> シュニーヴィント、391 頁。

<sup>113</sup> シュヴァイツァー、451 頁。

<sup>114</sup> マルコでは「四千人に食べ物を与える」(マコ 8:1-10) の直前には「耳が聞こえず舌の回らない人をいやす」(7:31-37) が置かれる。ルカには「四千人に食べ物を与える」という記事がない。

<sup>115</sup> ルツ、EKK I/2、574 頁。

のです」(20:33)と憐れみを求め、願ったのではなく、「試そうとして」(16:1)しるしを求めたに過ぎなかった。

イエスは彼らに対し、「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」(16:4)と言い、その場を去る。そして弟子たちに「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」(16:6)と告げる。イエスの言葉によるファリサイ派への言及は、山上の説教の中で「ファリサイ派の人々の義にまさっていなければ」(5:20)にも見られるが、ここでイエスは、ファリサイ派のパン種に注意するように言う。ファリサイ派は「盲人の道案内をする盲人」(15:14)であるので、その教えについて行ってはならない、ということがここで改めて指摘される。またマルコの並行箇所(マコ 8:14-21)においては、弟子たちはパン種の意味を悟らないまま、次のいやしの記事に移っている。しかしマタイでは、弟子たち自身がパン種とは教えのことだと悟る記事が付け加えられる(16:12)。ここからも、すでに目が見える者とされた弟子の姿が浮かび上がってくる。

その後マタイは、ペトロの信仰告白(16:13-20)、第一回受難予告(16:21-28)、イエスの変容(17:1-13)、第二回受難予告(17:22-23)を経て、第四の説教である「教会生活についての説教<sup>116)</sup>(18:1-35)を入れる。ここでは再びイエスの行動に目が向けられる。

ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた(19:1)イエスのもとには、大勢の群衆が従った。イエスはその場所で人々の病気をいやされた(19:2)。そこにファリサイ派の人々が近寄り、「イエスを試そうとして」(19:3)問答を始める。この「試す」(πειράζω)という語はマタイには6箇所で見られている(4:1, 4:3, 16:1, 19:3, 22:18, 22:35)。そのうち4章以外の四回において、「試す」行為者はファリサイ派となっている<sup>117)</sup>。また4:1は荒野での誘惑の場面のもので、行為者は悪魔である。ここまでにマタイは、22:35を除きマルコの記事を採用しているだけである。しかし、マタイは荒野の誘惑の場面で、「悪魔から誘惑を受けるため」(4:1)を、「誘惑する者が来て、イエスに言った」(4:3)と置き換えている。「誘惑する者」とは一体誰であろうか。悪魔なのか。それともマタイ福音書を通して「目の見えない者」とされていくファリサイ派なのか。マタイは「試みようとして」と表現したファリサイ派の質問の仕方が、神の意志からかけ離れた、まるで悪魔的なものであったと言いたいのかもしれない<sup>118)</sup>。

そして、イエスははいよいよエルサレムへと近づいて行く。エルサレムに入る直前に、マタイは、エリコの町を出たところで行なわれた、イエスによる二人の目の見えない人のいやしの記事を置く(20:29-34)。ここで「主よ」と三度呼びかける二人は、エルサレムに向かうイエスに対して憐れみを求める。この箇所は9:27-31の二重記事であると考えられるが、9:27-31で強調されていた信仰問答的な要素はここには見られない。ただ主の憐れみによってのみ、目が開かれると述べられるだけである。

イエスは子ろばに乗って、エルサレムに迎えられる(21:1-11)。そこで神殿から商人を追い出した記事(21:12-13)に続けて、マタイは境内におけるいやしの記事を挿入する(21:14)。これは共観福音書に記されている、イエスがエルサレムで行なった唯一のいやしであるが(マコ 11:1-11、ルカ 19:28-40)、この行為こそ、ダビデの子たるメシアが神殿において初めて行なったものであった。目の見えない人は神殿から締め出される存在だった(サム下 5:8、レビ 21:17)。それだけではなく、マタイの時代にはマタイ共同体はユダヤ教と敵対関係にあった。神殿からそこで売り買いをしていた人々が追い出され、目の見えない人や足の不自由な人がいやされるこの記事は、マタイ共同体にとって何を意味するのか。それ

<sup>116)</sup> 小河『旧約の完成者イエス』、80頁。

<sup>117)</sup> 22:35は、「ファリサイ派の人々のうちの一人、律法の専門家が」と読めるので、ここでも行為者はファリサイ派であると考えられる。

<sup>118)</sup> cf. ルツ、EKK I/3、120頁。

はイエスによって建てられた(16:18)教会こそが新しい民の参集が始まった「新しい神殿」であることを意味するのではないか。そしてファリサイ派はそこから追い出される。信仰を告白し憐れみを願うマタイ共同体の人々が、そこにおいて「目が開かれた者」となると主張しているのではないだろうか。この新しく集められた信仰者たちは、子どもたちにいたるまで(21:15)「ダビデの子にホサナ」と賛美するのである。

このように、マタイが描くファリサイ派は、「目が見える者」とされたマタイ共同体と完全に対比されている。その記述はこれ以降も続く。「ぶどう園と農夫のたとえ」(21:33-46)には「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族<sup>119</sup>に与えられる」(21:43)とのイエスの言葉が記されているが、この節はマタイが挟み込んだと考えられる<sup>120</sup>。またこの言葉を聞いて、イエスが自分たちのことを言っていると気づき、イエスを捕えようとしたのは祭司長とともにファリサイ派の人々であると、マタイだけが強調する<sup>121</sup>。ここからも、マタイにとってのファリサイ派は神の国から遠く離れてしまった存在であることが分かる。

続く「皇帝への税金」(22:15-22)でも、ファリサイ派は主な行為者としてイエスを罠にかけようとする<sup>122</sup>。しかし言葉じりをとらえようとしていた彼らは、イエスと問答をした後、その言葉に驚きイエスをその場に残して立ち去ってしまう。この箇所でもマタイは、イエスの言葉を受け入れずにイエスの元を去るファリサイ派の姿を印象づける。

また「最も重要な掟」(22:34-40)においても、マタイはマルコの「一人の律法学者」(マコ 12:28)を「そのうち〔ファリサイ派の人々〕の一人、律法の専門家」(22:35)に変え、「試そうとして」(22:35)という言葉の挿入する。そしてこの箇所での最も大きな違いは、マルコでは律法学者が適切な答えをし、イエスから「あなたは、神の国から遠くない」と評価された(マコ 12:34)のに対し、マタイではイエスが問いに答えた場面で終わり、質問者が肯定されることはない点である。律法学者がイエスに肯定的な態度を取る場面はルカにも出てくるが<sup>123</sup>、マタイではファリサイ派に対してそのような描き方をすることはないのである。

そして、イエスはファリサイ派に対して、「ダビデの子についての問答」(22:41-46)を仕掛ける。この場面も、マルコではイエスは人々に教え、大勢の群衆はその教えに喜んで耳を傾けた(マコ 12:37)場面が描かれているが、マタイでは論争相手はファリサイ派の人々になっている。マタイにとってファリサイ派は、反対する者・対抗する者であり、イエスをメシアであると認識できない者、いや認識しようとしたくない者、すなわち、「目のみえない者」なのである。そしてファリサイ派は「その日からは、もはやあえて質問する者はなかった」(22:46)、つまりここから、ファリサイ派は沈黙する者となる。マタイ共同体は、敵対するファリサイ派と最終的に決別したのだということが強調されているとも言えよう。

これらの一連の流れを踏まえて「律法学者とファリサイ派の人々を非難する」(23:1-36)を見ると、その背景にはイエスの時代におけるイエスとファリサイ派との敵対関係があったことが明確である。また、

119 ルツはこの「民族」(ἔθνος)を、「異邦人」とも「教会」とも同定されてはいけないとする。マタイは明らかに ἔθνος を社会的ではなく、「その実をもたらず」の付加によって定義しようとした。イスラエルに代わって教会が登場するのではなく、これまでイスラエルに属していなかった者たちに、実をもたらずようにとの訴えをしているのである(ルツ、EKK I/3、274頁)。

120 ルツ、EKK I/3、264頁。

121 マルコでは「彼らは」(マコ 12:12)、ルカでは「律法学者たちや祭司長たちは」(ルカ 20:19)となっている。

122 マルコでは「人々は…ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした」(マコ 12:13)となっており、主な行為者は「人々」だと読み取ることができる。

123 ルカ 20:39には、復活についての問答(ルカ 20:27-40)におけるイエスの答えに感心した律法学者の存在が描かれている。

マタイの時代のマタイ共同体とファリサイ派との間の緊張関係も同時に感じられるのではないか。ファリサイ派はイエスがメシアであることを理解せず、新しい視力を贈られることを拒絶する。マタイは「ものが見えない」と彼らの無理解を強調し、エルサレムのために嘆く（23:37-39）のである。「ものが見えない」ファリサイ派は、イエスの幾度なる呼び掛けに応じようとしなかった（23:37）。だから彼らの家は見捨てられ、荒れ果てる（23:38）。そしてイエスは言うのである。「お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない」（23:39）と。

さて、マタイ福音書の中にファリサイ派はもう一度出てくる。それは「番兵、墓を見張る」（27:62-66）においてである。ここで祭司長たちとファリサイ派の人々は、三日目までイエスの墓を見張るようにピラトに進言するのだが、なぜここでファリサイ派が出てくるのだろうか。それは天のしるしを求めたときに（16:1-4）、イエスから直接「ヨナのしるし」の話を聞いたからか<sup>124</sup>。だが、祭司長たちとファリサイ派が安息日にピラトの所に行ったことを想像することは極めて難しい<sup>125</sup>。かなり大胆な想定ではあるが、ファリサイ派はイエスの復活を、またマタイの時代のイエスについての宣教を、封印し、広まらないように見張っていたのではないだろうか。マタイ共同体にとって「見えるようにされた」自分たちと違い、ファリサイ派の人々は今も「見えない者」なのである。その彼らは、復活のイエスによる使信がこれ以上伝わっていかないように、反対者としてその教えを封印しようとしていたのかもしれない。ファリサイ派はここでイエスのことを「人を惑わすあの者」（27:63）とし、イエスが復活したことになると「人々は前よりもひどく惑わされる」（27:64）ことになると言った。だが、マタイの主張によれば、彼らファリサイ派こそ、「盲人の道案内をする盲人」（15:14）、つまり民衆を惑わす者だったと言えるのである。

#### 4 - 2、τυφλός と ἀνοίγω（開く）との関係

本稿 3 - 1 - 3 - 2 でも少し触れたが、マタイは二人の目の見えない人のいやし（20:29-34）において、マルコの並行箇所（マコ 10:51）で使われている ἀναβλέπω を ἀνοίγω に変える（20:33）<sup>126</sup>。その結果、「目が見えるようになりたいのです」（マコ 10:51）という目の見えない人の言葉は、「目を開けていただきたいのです」（20:33）となる。また、マルコには並行箇所がないが、マタイのもう一つの二人の目の見えない人のいやしにおいても（9:27-31）、「二人は目が見えるようになった」（9:30）の「見える」には ἀνοίγω が使われている<sup>127</sup>。なぜマタイは「目が見える」という状態をあらわす語に ἀνοίγω を用いたのだろうか。ここでは、ἀνοίγω がマタイ福音書においてどのように用いられているのかを見ながら、τυφλός との関係について考察していきたい。

まず、ἀνοίγω の前に ἀναβλέπω について考察する。

ἀναβλέπω は共観福音書の中に 16 回（マタイ 3 回<sup>128</sup>、マルコ 6 回<sup>129</sup>、ルカ 7 回<sup>130</sup>）見られ、その意味

<sup>124</sup> ヘア、557 頁。

<sup>125</sup> ヒル、438 頁。

<sup>126</sup> ルカの並行箇所（ルカ 18:41）においても、マルコと同様に ἀναβλέπω（見える）が使われている。

<sup>127</sup> この語を新共同訳は「見える」と訳すが、口語訳・フランシスコ会訳・岩波訳は「開かれた」とする。

<sup>128</sup> マタ 11:5、14:19、20:34。

は、大きく三つに分けられる。第一には、対象物や人物を中立的な態度で視覚的に捉えるという意味で見上げること（マコ 16:4、ルカ 19:5、21:1）。第二には、神に希望を託す行為として、天を見上げること（マタ 14:19、マコ 6:41、7:34、9:16）。そして第三には終末的・メシア的な救済の時の突入のしるしとしての視力の回復を意味する（マタ 11:5、20:34、マコ 8:24、10:51、52、ルカ 7:22、18:41、42、43）<sup>131</sup>。この第三の意味から考えると、マタイは二人の目の見えない人のいやし（20:29-34）で ἀνοίγω を用いているが（20:30）、マルコ 10:51 と同様に ἀναβλέπω を用いても何ら問題はなさそうである。ではなぜ、マタイはここであえて ἀνοίγω を使ったのであろうか。ἀναβλέπω に含まれる「視力の回復」という意味を後退させる意図があったからなのか<sup>132</sup>。

そもそも ἀνοίγω は他動詞として「開く」、自動詞として「開かれる」を意味し、受動にも用いられる。共観福音書には 18 回（マタイ 11 回<sup>133</sup>、マルコ 1 回<sup>134</sup>、ルカ 6 回<sup>135</sup>）見られる。一般にここで開くのは神の力であり、それは地上のイエスおよび終末論的な再臨のキリストの救済行為の中で明らかとなる。さらに、その力は弟子や使徒の救済行為の中にもあらわれるものであるという<sup>136</sup>。マタイはこの ἀνοίγω を、神の力を強調するために、そして終末論的なキリストの救済行為の始まりとして神の力を位置付けるために用いていると考えられる。そうすると、二人の目の見えない人がいやされた場面を含め、マタイ福音書はどのように読むことができるのだろうか。ここからマタイ福音書における ἀνοίγω の用法を見ていながら、探っていきたい。

まず「占星術の学者たちが訪れる」（2:1-12）の中で用いられている。ここで学者たちは宝の箱を「開けて」、黄金、乳香、没薬をイエスに献げる（2:11）。ここで宝の箱を開けたのは、占星術の学者たちである。しかし、神の力によってイエスの誕生が異邦人である彼らのもとに伝えられたのは何故か。それは異邦人にも神の救いの業が「開かれる」ためである。彼らが開いた宝の箱は、異邦人にとっての救いの開始を告げるものとして捉えることができるのである<sup>137</sup>。

次に出てくるのは、「イエス、洗礼を受ける」（3:13-17）の中である。イエスが洗礼を受けると、天がイエスに向かって「開き」、神の霊が鳩のようにイエスの上に降る（3:16）。この「天が開き」という表象はエゼ 1:1-4 にも見られるが、天が開かれるところにおいてのみ、神は人間に近づくことが出来る<sup>138</sup>。つまりマタイは、ここで神がイエスに近づき、これからイエスを通して神の業が行われていくことを強

129 マコ 6:41、7:34、8:24、10:51、52、16:4。

130 ルカ 7:22、9:16、18:41、42、43、19:5、21:1。

131 P. G. Müller 「ἀναβλέπω」、荒井献・H. I. マルクス監修『ギリシア語新約聖書釈義事典 I』教文館、1993年（以下『釈義事典 I』）、109頁。

132 田川建三は ἀναβλέπω を、『『上の方を見て』とも訳せる語。接頭語 ἀνα には「上」の意味もあるし、「再び」の意味もある。前者なら単に「上の方を見る」の意味（マコ 6:41、7:34）。後者の意味はたとえばマコ 10:51、52。昔から両方の語義に用いられ、前後関係からどちらの意味か判断する以外にない」（田川建三「マルコ福音書／マタイ福音書」（新約聖書 訳と註 1）、作品社、2008年、286頁。）とし、マタ 20:34、マコ 8:24、10:51、52、ルカ 18:41 の訳を「再び見える」とする。「視力の回復」を強調すると、このような訳になるだろう。だが、新共同訳・新改訳（第三版）・口語訳・フランシスコ会訳・岩波訳は単に「見える」という訳語を採用する。しかし個人的には、目の見えない人が生まれつき目が見えないのか、または以前は目が見えていたが現在は目が見えない状態なのか、聖書本文中には記載されておらず、視力の回復をここで強調する必要はないように感じる。

133 マタ 2:11、3:16、5:2、7:7、8、9:30、13:35、17:27、20:33、25:11、27:52。

134 マコ 7:35。

135 ルカ 1:64、3:21、11:9、10、12:36、13:25。

136 P. G. Müller 「ἀνοίγω」、『釈義事典 I』、140頁。

137 ルツはこの箇所について、異邦人伝道に狙いを定めての解釈の他に、キリスト論的解釈、訓戒的解釈、そして神の計画から歴史を理解することという四つの解釈がなされてきたという（ルツ、EKK I/1、157頁）。

138 シュヴァイツァー、57頁。

調する<sup>139</sup>。

そして、マタイ福音書におけるイエスの最初の説教である「山上の説教」(5:1-7:29)を始めるとき、イエスは口を「開き」、教えられる(5:2)。ここでも ἀνοίγω が使われているのであるが、イエスはその口を開いて神の教えを語ることは、どのような意味を持つのか。「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる」(13:35)は詩編 78:2 からの引用であるが、5:2、13:35 に共通する ἀνοίγω τὸ στόμα (口を開く) という言い回しは旧約において多く見られる<sup>140</sup>。つまり、まさにイエスは旧約の預言を成就する者であるということ、マタイは伝えようとしていると言えよう。

山上の説教の中で、イエスは「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」(マタ 7:7-8)と言う。この「開かれる」も ἀνοίγω であるが、二人の目の見えない人は「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」(マタ 9:27)と、イエスに対し門をたたくのである。本稿 3-1-3-1 において、この箇所における信仰問答的な要素を指摘したが、彼ら二人の目の見えない人の目が信仰告白によって「開かれた」ということに、自らも信仰を告白することによって信仰の目が「開かれた」マタイ共同体の人々は自分たちを重ね合わせたのではないか。マタイにとって、その目は単に「ἀναβλέπω」(見える)ようになったのではなく、神によって「ἀνοίγω」(開かれた)のである。神によって目が開かれたマタイ共同体の人々は、今や「見える」者となった。イエスが弟子たちに向けて言われた「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ」(マタ 13:16)という言葉は、「見える」者とされたマタイ共同体の人々にとっても、自分たちのこととして受けとめることができたとも言えるだろう。

そしてエルサレムに迎えられる前に二人の目の見えない人をいやした場面で(20:29-34)、マタイはマルコの「目が見える(ἀναβλέπω)ようになりたいのです」(マコ 10:51)を、「目を開けて(ἀνοίγω)いただきたいのです」(マタ 20:33)と変える。それはまさに神の力によってのみ、そして憐れみによってのみ、目が「ἀνοίγω」(開かれる)ということを強調するために、マタイは ἀνοίγω を用いたのではないだろうか。マタイにとって二度の目の見えない人のいやしの行為は、単なる肉体的な視力の回復ではなく、霊的に神との関係が開かれるものであったといえる。だからマタイは、この箇所でも ἀνοίγω を用いる必要があったのだろう。

だが、神の力で開かれたことによって τυφλός ではなくなったマタイ共同体の人々だが、その目を覚ましているように、との警告も出される(25:13)。マタイの時代、再臨は遅れてしまった。しかし、いつ何どき終末が訪れるかは分からない。彼らがいくら「目が開かれた者」であろうとも、準備を怠ってしまうと、いくら「開けてください」と叫んでも(25:11)、その扉が再び開かれることはない<sup>141</sup>。

<sup>139</sup> マルコの並行箇所では「天が裂けて」(マコ 1:10)となっている。ただしルツは、ルカの並行箇所がマタイ同様「天が開け」(ルカ 3:21)となっているため、マタイが Q 資料をそのまま採用した可能性も否めないとする(ルツ、EKK I/1、215 頁)。

<sup>140</sup> 七十人訳に約 40 回(ルツ、EKK I/1、45 頁)。

<sup>141</sup> マタイ福音書の中で ἀνοίγω が用いられている所は他に二箇所ある。一つ目は税金を払うためにペトロが魚を釣る場面である「最初に釣れた魚を取って口を開けると」(17:27)に、もう一箇所はイエスが十字架上で息を引き取った場面に出てくる「墓が開いて、眠りについてた多くの聖なる者たちの体が生き返った」(27:52)に見られる。この箇所について、ἀνοίγω を神の力の現れであると解釈し、自説を展開することもできるが、本稿のテーマとあまり関係がないと思われるので割愛する。

## 5、まとめ

以上の考察を通して明らかになったことは、以下の通りである。

(1) マタイは他の福音書記者に比べて τυφλός を多く用いている。その中には物語の導入の場面(12:22-32、15:29-31、21:12-17)で見られたように、マタイだけがマルコやルカにはない τυφλός について言及をする、という場面も見られ、マタイは特定の意図を持って τυφλός を用いている。

(2) τυφλός がいやされることは、旧約聖書の預言の成就であると考えられ、そのことをマタイは神の国の始まりに位置付けている。

(3) 二箇所にある二人の目の見えない人をいやす記事(9:27-31、20:29-34)に見られる信仰問答的な要素や、主に憐れみを求める記述などから、このいやしは物理的な視力の回復にとどまらず、マタイ共同体にとって信仰の目が開かれたことを意味するものであった。

(4) マタイはファリサイ派こそが τυφλός であるということを強調していく。マタイ福音書を通して、マタイ共同体が「目が開かれた者」となり、ファリサイ派が τυφλός であることが明らかにされていく。そこに見られる対比こそが、マタイの時代に存在した、マタイ共同体とファリサイ派との対立を映し出しているものであると考えられる。

(5) マタイは、マタイ共同体の「目が開かれた」のは神の力によってであり、決して自分の力で「開けた」のではないということを強調する。マタイ共同体の人々はこの書を読むたびに、自分たちが信仰を告白したことで見える者とされたことを思い起こしていたのかもしれない。

以上のように、τυφλός はマタイ福音書にとって重要な意味を持つ鍵語であるといえよう。今後、マタイ福音書に出てくる視覚に関する語や、ἀνοίγω のように関連した場面で用いられている語、あるいは他の福音書との比較をすることによって、さらにマタイ福音書における「見える」ことについての理解が深まることが期待できる。小論文としてはここで筆を置くが、個人的にはこれからも研究を続けていきたい。

### <参考文献>

- K. アーラント監修(荒井献・川島貞夫監修)『四福音書対観表 ギリシア語-日本語版』日本基督教団出版局、2000年。  
荒井献・H. I. マルクス監修『ギリシア語新約聖書釈義事典 I~III』教文館、1993、1994、1995年。  
H. R. ウェーバー(橋本滋男訳)『イエスの招き マタイ福音書の研究』日本基督教団出版局、1974年。  
大貫隆『世の光イエス』(福音書のイエス・キリスト④ ヨハネによる福音書)講談社、1984年。  
小河 陽『旧約の完成者イエス』(福音書のイエス・キリスト① マタイによる福音書)講談社、1983年。  
同『マタイ福音書神学の研究 その歴史批評的考察』教文館、1984年。  
同「マタイによる福音書」、『新版総説新約聖書』日本基督教団出版局、2003年。  
加山久夫『ルカの神学と表現』(聖書の研究シリーズ47)教文館、1997年。  
木田献一他監修『新共同訳 聖書辞典』キリスト新聞社、1995年。  
木原桂二『ルカの救済思想 断絶から和解へ』日本キリスト教団出版局、2012年。

- 旧約新約聖書大事典編集委員会『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年。
- 佐藤 研『新約聖書 新約聖書翻訳委員会訳』岩波書店、2004年。
- 同『福音書共観表』岩波書店、2005年。
- E. シュヴァイツァー（佐竹明訳）『マタイによる福音書』（NTD新約聖書註解2）NTD新約聖書註解刊行会、1978年。
- 同（小原克博訳）『新約聖書への神学的入門』（NTD補遺2）日本基督教団出版局、1999年。
- L. ショットロフ、W. シュテューゲマン（大貫貴訳）『ナザレのイエス 貧しい者の希望』日本基督教団出版局、1989年。
- J. シュナイダー（斎藤顕訳）「ペテロの第一の手紙」、『共同書簡』（NTD新約聖書註解10）NTD新約聖書註解刊行会、1975年。
- J. シュニーヴィント（量義治訳）『マタイによる福音書』（NTD新約聖書註解別巻）NTD新約聖書註解刊行会、1980年。
- D. M. スミス（松永希久夫訳）『ヨハネ福音書の神学』（叢書新約聖書神学3）新教出版社、2002年。
- 田川建三『新約聖書 訳と註1 マルコ福音書／マタイ福音書』作品社、2008年。
- 角田信三郎『マタイ福音書の研究』創文社、1996年。
- W. D. デーヴィス（松永希久夫他訳）『イエスの山上の説教』（聖書の研究シリーズ35）教文館、1991年。
- 名尾耕作『旧約聖書へブル語大辞典』聖文舎、1982年。
- 日本聖公会『祈祷書』1990年。
- C. A. ニューサム、S. H. リンジ編（荒井章三／山内一郎日本語版監修）『女性たちの聖書注解』新教出版社、1998年。
- 野々目晃三『論考 マタイによる福音書』聖公会出版、2004年。
- F. ハーン（須藤伊知郎訳）「マタイによる福音書」、『新約聖書神学 I下』日本キリスト教団出版局、2007年。
- 同（勝田英嗣訳）『新約聖書の伝道理解』新教出版社、2012年。
- 橋本滋男「マタイによる福音書」、『総説新約聖書』日本基督教団出版局、1981年。
- 同「マタイによる福音書」、『新共同訳 新約聖書注解I』日本基督教団出版局、1991年。
- 同『イエスとマタイ福音書』（聖書の研究シリーズ65）教文館、1994年。
- 原口尚彰『新約聖書概説』教文館、2004年。
- D. ヒル（大宮謙訳）『マタイによる福音書』（ニューセンチュリー聖書注解）日本キリスト教団出版局、2010年。
- R. H. フラー（鈴木真也訳）「マタイによる福音書」、『ハーバー聖書注解』教文館、1996年。
- フランシスコ会聖書研究所『聖書 原文校訂による口語訳』サンパウロ、2011年。
- D. R. A. ヘア（塚本 恵訳）『マタイによる福音書』（現代聖書注解）日本基督教団出版局、1996年。
- J. L. マーティン（原義雄・川島貞雄訳）『ヨハネ福音書の歴史と神学』日本基督教団出版局、1984年。
- 増田誉雄「マタイの福音書」、『新聖書注解』いのちのことば社、1972年。
- B. マリーナ、R. ロアボー（大貫隆監訳、加藤隆訳）『共観福音書の社会科学的注解』新教出版社、2001年。
- U. ルツ（小河陽訳）『マタイによる福音書』（EKK新約聖書註解 I/1~4）教文館、1990、1997、2004、2009年。
- 同（原口尚彰訳）『マタイの神学』（聖書の研究シリーズ46）教文館、1996年。
- E. ローゼ（小河陽訳）『新約聖書神学概説』日本基督教団出版局、1982年。
- W. F. Arndt, F. W. Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, Chicago, IL: Chicago Univ. Press / London: Cambridge Univ. Press, 1952<sup>4</sup>.